

Hisaye Yamamoto の“The Legend of Miss Sasagawara”における「狂気」

宗教的含意に見られる二重の社会批判

古川拓磨

はじめに

Hisaye Yamamoto(1921-2011)の“The Legend of Miss Sasagawara” (1950)は、第二次大戦中の日系人強制収容所を主たる舞台とした短編小説である。本作品は主人公 Mari Sasagawara の「狂気」を Kiku という同じ日系アメリカ人二世の視点から語る。従来の批評では、Mari の狂気は収容所という閉鎖的な環境下の家父長制に対する反動であり、真に狂気なのは彼女自身より、むしろ伝統文化や政治制度そのものであると分析されてきた。本発表はそれらの解釈に依拠しつつ、作者の日系人性、女性性に加えカトリック信仰との共鳴という三重のマイノリティ要素を踏まえ、Mari の狂気について再検討した。

フーコーによれば、プラトンやルネサンスの時代には「神懸かり」的で神聖視された「狂人」は経済活動と医学の進展により監禁し治療すべき対象とみなされるようになったという。彼らは社会規範に従って行動することができて初めてその狂気から解放されたとみなされた。ならば、かつてはダンサーとして華麗に自己表現を行っていた Mari が不調をきたしているという事実は、収容所の異常性を浮き彫りにしていると言えよう。収容所の閉鎖性や人々の偏見、監視、個人を様々な類型や規範に閉じ込める家父長制及び集団主義が Mari の変調を増長したという批評を、作者の体験や信条と照らし合わせ、補強した。

Elaine Kim をはじめとして従来のアジア系アメリカ文学批評では、マジョリティ文化への同化の一環であると批判的に捉えられてきたキリスト教の影響分析は等閑視されてきた。Yamamoto は 1950 年代初頭に、*The Catholic Worker* を出版する平和主義共同体で奉仕活動を行った。カトリックに深く影響された彼女の信条は、他の作品においてもメシア的な性質を帯びた人物たちが登場することなどに表象されているが本作品をキリスト教的な視点から解釈したものは見られない。仏教徒の家庭に育ち、のちにカトリックと深く共振した作者の独特な宗教観による影響を考察した。

1. 噂話の暴力

冒頭から、元バレリーナの Mari が派手に着飾って闊歩する姿が目撃され、それは一部の収容者の羨望の的になりうるが、慎み深さを重んじる伝統的な価値観からの逸脱として彼女を疎外する要因ともなる。しかし語り手 Kiku の提示する Mari に関する情報は必ずしも信頼できない。それは Mari の噂が往々にして複数の仲介者を通して伝達され、語り手が“if Miss Sasagawara was not one to speak to, she was certainly one to speak of, and she came up quite often as topic for the endless conversations which helped along the monotonous days” (22)と証言することからも認められる。Kim も “[internees] use her [Miss Sasagawara] to help relieve their tension, boredom and sense of insecurity” (109)と指摘するように、Mari は強制収容所の日系コミュニティの中の緊張をほぐすある種の scape goat として、客体化されていたのである。

自らの行動について弁明する機会が一切与えられていない中年で独身の Mari はコミュニティからの一方的な噂と非難の的となり、徐々に「正気」を失う。しかしそれは同時に詮索好きで、伝統的規範に当てはまらない他者を疎隔し安堵感を得ようとするコミュニティの精神的不健康を浮き彫りにする。Yamamoto は「狂人」とされた Mari に同情的に、「正常」な他の収容者たちの行動規範や強制収容そのものの正当性に疑問を提示している。

2. 無関心と好奇心の間のジレンマ

憶測を呼ぶような Mari の奇妙な行動一掃除の手伝いを申し出た Mr. Sasaki に水を浴びせたり、遊んでいる少年たちや睡眠中の少年をじっと見つめる、男性医師からの「触診」(“pawing” 26)を嫌って病院から逃亡する、など一はエスカレートしていく。収容者たちが Mari に好奇の視線を向けるのとは対照的に、父 Rev. Sasagawara は僧侶として、修行に明け暮れ、娘に無関心である。Mari 自身もよそよそしく生活しているが、それは自身のプライバシーを守るためであり、必ずしも一貫性のあるものではないことは、彼女が時折見せる愛想の良い振る舞いや、バレリーナとして各地を巡っていたという経歴に仄めかされており、他の収容者たちの Mari に関する「誤読」が仄めかされている。

華美な出で立ちで、中年でありながら未婚で子どももないという、日系人女性の伝統的な規範から逸脱した Mari は詮索好きな周囲の好奇心と、父親の無関心との間で板挟み状態になり孤立する。本

来、親としてまた宗教指導者として精神的なサポートとなるべき Rev. Sasagawara の娘への無関心は、King-Kok Cheung も論じるように収容所の 3 分の 2 を占めていた市民権を有する二世たちへの「政府の冷淡さ」(“government’s callousness” 119)と対応している。どこにも救いを見出せない Mari の苦悶とそれに呼応する「狂気性」は、日系コミュニティにとどまらない当時のアメリカ社会全体からの重圧を体現した、作者の逆説的な社会批判と読めるだろう。

3. 宗教的含意に見られる社会批判

Rev. Sasagawara が熱心に励む八正道の修行はしかし、娘へのネグレクトへと帰結する。さらに語り手の記憶内の仏教式葬式は、黒や灰色という暗色の多用により不穏さを掻き立てる。参列者と僧侶の面前で全員に半ば強制的に課せられる焼香の儀式は、仏教の抑圧的一面を示唆すると同時に、収容所の日系人がアメリカへの忠誠を誓うか否かの質問(いわゆる忠誠登録)に答えさせられたという事実をどことなく彷彿とさせ、形骸化した自己中心的な宗教と暴力的な政治に対する警鐘を鳴らす。

また、腹痛のため診療所で医師の診察を受けた Mari は、触診を拒んで着の身着のまま逃げ去る。収容所内の権威者たる男性医師から逃亡する彼女の様子は、福音書に記載の幼児を虐殺するヘロデ王のもとからエジプトへ逃避するキリストの母マリアの姿を想起させる。その原因不明の腹痛も、キリストを処女懐胎したマリアの苦悩を思わせる。

Yamamoto はカトリック教会の洗礼を受けた信者ではないものの、“Christian anarchist”を自称し仏教の教えも否定しないという。そのシンクレティックで極めて独特な思想を考慮すると主人公 Mari と聖母 Mary の名が類似していることは示唆的である。仏教、キリスト教の両者に馴染み深い Yamamoto は、前者に当時の政治の不条理を重ねてその強権性を暴く。そして特に後者には、迫害を受けたマイノリティ女性の代弁者としての Mari にカトリックにおいて崇敬を集める聖母マリアのイメージをある種のオマージュのように託すことで、作者自身の家父長制への非難とカトリックへの共感を表明している。

おわりに

本発表では、Yamamoto の描く日系人コミュニティの集団主義的文化基準や父権的宗教の狂信がはらむ静かな暴力性が、収容所内の相互監視の強い環境においてさらに増幅され、その社会・文化規範から逸脱した Mari を「狂人」へと仕立て上げていく様を考察した。必ずしも信頼できない語りや、父の娘への態度を注意深く読み取ることで、「正気」と「狂気」の対立を揺るがすことが可能であろう。終盤に語り手により語り直される Mari の詩は、宗教的解脱のために高潔にまた冷淡に生きる人物について描き、またその傍らに生きる別の人物の苦悩を語っており、実際には Mariこそが「まとも」なのであり精神的に最も自由で解放されていた存在であることを示唆する。このことは社会や文化からの抑圧にも関わらず、Mari の魂とも呼ぶべき最深部は侵されていなかったのだという希望の余地を残す。

同時に、Yamamoto が共振するカトリックにおける聖母マリアのイメージが Mari に付与されているとすれば、それもかつて狂気が神聖視されていたというフーコーの考察とも響き合い、Yamamoto のキリスト教への期待が表わされていることを指摘した。本作品は表面上では、イノセントな好奇心による視点から個人の「狂気」な様を描くテキストであるが、同時に、それは社会から幾重もの抑圧を受けたある日系アメリカ人女性の、作品題にもある「不可思議/伝説」的な魂の物語として読めるだろう。

主要引用参考文献

- Cheung, King-Kok. “Thrice Muted Tale: Interplay of Art and Politics in Hisaye Yamamoto’s “The Legend of Miss Sasagawara.”” *MELUS*, vol. 17, no. 3, 1991, pp. 109-125.
- , *Articulate Silences: Hisaye Yamamoto, Maxine Hong Kingston, Joy Kogawa*. Cornell UP 1993.
- Kim, H. Elaine. *Asian American Literature, An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Temple UP, 1982.
- , “Hisaye Yamamoto: A Woman's View.” *Seventeen Syllables: Hisaye Yamamoto*, edited by King-Kok Cheung, Rutgers UP, 1994, pp. 109-117.
- Yamamoto, Hisaye. “The Legend of Miss Sasagawara.” *Seventeen Syllables and Other Stories*, edited by King-Kok Cheung, Rutgers UP, 2001, pp. 20-33.